
桜色車輪

上葵

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

桜色車輪

【Nコード】

N1446P

【作者名】

上葵

【あらすじ】

青春のカタチは人それぞれだと思います。

中学時代を思い返すに、彼女の名前は外せないだろう。

それは俺がまだ『僕』で彼女がどこまでも純粹だった中学二年生のころの話だ。花が散り、若葉が出始めた桜の季節に、クラスごとに選ばれる委員会活動に風紀という、内申の足しにもならないものを選択した俺は、その顔合わせで初めて彼女の姿を見た。

「いままで見回りなんてなかったのに。今年から新ルールだなんてやってられないよ。お前もそう思うだろ？」

他クラスのやつとペアを組んで見回りをすると思われてはいたが、よりにもよって女子とは、と予想外な采配に戸惑う俺に彼女は十年來の既知に話しかけるよう氣さくに同意を求めてきた。

濡れたカラスの羽みたいに長い黒髪を背中まで垂らし、凜とした雰囲気放つ少し大人びた少女だった。小顔ですっきりとした目鼻立ちをしており、同じ中学生とは思えないほどだ。

「そ、そんなことないよ」

「つまんないやつ」

初対面でズバリと言われた過去の自分を振り返ると、たしかに真面目でいささか融通の効かない性格だったように思う。

当時の自分にとって、かなり腹立たしい寸評であったが、それから彼女と仲良くなつていくのに、そう時間はかからなかった。

なにに関しても明け透けとざつくばらんな彼女の対応は、目立つことを恐れ、日陰で佇む真面目な『僕』には、畏怖とともに憧れの対象に含まれていたからだろう。

彼女と一緒にの委員会活動が開始したのは初顔合わせから3日経つてからだつた。

放課後の閑散とした渡り廊下を、二人で何も言わず歩いたことを

今でもよく覚えている。

彼女が僕の前を行き、数歩ぶん離れてそれに続く。女子と男子という関係を鑑みれば普通は逆なのだろうが、そこは単に性格の違いというやつだろう。

ぴんと伸びた彼女の背中を刷り込みが完了した子鴨のように追いかけながら、通りすがりの人に気さくに声をかけられる彼女の顔の広さに驚いたものだ。

意図した出会いでなく、どちらかといえば最悪な印象を抱いた顔合わせではあったが、心の底では通じる所があったのか、僕はすぐに彼女に惹かれようになった。

当然、男女間のギャップから会話が途切れることもあったが、彼女と過ごす沈黙は不思議と苦ではなく、よく出来たクラシックCDを聴いているみたいに落ち着いた。

あくまで僕の想像に過ぎないが、彼女も僕と同様に週2回の放課後の見回りという箸にも棒にもかからない活動を楽しんでいたのではないだろうか。

「ただ歩きまわるだけなんて、自分の存在価値を否定されてるみたいだ」

「か、考えすぎだよ。意義ある仕事だと僕は思うよ」

「……調子狂うな」

きっかけなんて大それたものはなかった。気が付いた時には友達と評するに値する関係にはなっていたと思う。

真面目一辺倒だった僕が初めての規則違反をしたのは蝉が鳴き出す初夏のことだ。

待ち合わせの教員室前で合流した僕らは、いつも通り30分の校内徘徊を開始する予定で歩きだした。

ちょうど三階に着いた時、彼女はチェシャ猫のようにニンマリ笑って僕の袖を引き足を止めさせた。

「どうしたの？」

と疑問符を浮かべ振り向いた僕の目の前に掲げられたのは、キーホルダーも付けられていない、シンプルなカチをした鍵だった。

「何それ。なんの鍵？」

「フッフッフ、なんだと思う？」

屋上の鍵だった。

当然ながら立入禁止の屋上は見回り範囲に含まれていないし、なにより南京錠で施錠されている。

事務室に下げられていたそれを丸一日無断拝借をし、合い鍵を作ったのだそうだ。変なところで活動的な彼女に連れられて、わけもわからぬまま初夏の涼しげな風が吹き抜ける屋上に登った僕は、規律を正すべき風紀委員が、規則を破っていることに唇を尖らせた。

「固いこと言うなよ」

貯水タンクに伸びる太い二本のパイプに腰掛け、彼女は浅く息をはいた。

「だけどバレたら怒られるよ」

罪悪感と一抹の不安から汗を垂らす僕の良心に、彼女はその白い頬を弛緩させ笑い皺を刻ませた。

「バレるわけないだろ。ここで話でもして時間を潰し、校舎を回ったフリをすればいいんだ」

「何かあったらどうするの？」

「いままで何もなかっただろ。適当に時間が経ったら、先生に虚偽の報告をする。異常なし、てな。かーんぺき」

冗談めかした語尾にごまかされることなく、僕は尚も横暴な彼女に文句を言った。息抜きすることを知らない僕にとって、そのリスクーな体験は、好奇心よりも恐怖を先行させていたのだ。

「どうして屋上なの？話なら歩きながらでもできるじゃないか」

「気持ちいいだろ？」

しれつといい放った彼女の言葉通り、顔に当たる初夏の風は爽やかさとともに快感を僕らにもたらしてくれていた。

「それに、自分の知らない場所があるのが嫌なんだ」

彼女はそういう人だった。

あれよあれよといつの間にか、僕らの日課は、屋上に行き、校舎を回ったフリをするのに変更されていた。僕が流されやすいのではなく、彼女には得も言わせぬ瞳の強さがあつたことを付け加えておく。

その内、秘密の会合は放課後という限定的な時間ではなく、二人の都合が合えば周りの目に注意して行われた。

学校という閉鎖的空間での開放感を求める行為は、卒業まで続けることになる。

別にお昼と一緒に食べたとか、喫煙や飲酒、ふしだら行為に及んだなど疚しいことは一切ない。

ただ屋上に行き、進路とか友人関係とか、どこにでもいる中学生同士の冴えない会話をしていただけだ。

僕らの関係は、サボり先が屋上ということ以外、なにも変わった点などなかった。強いてあげるとするならば、彼女は呆れるくらいの読書家でよく本を勧められたくらいか。

「これ読んでみ。主人公がお前に似てるんだ」

彼女は穏やかな微笑を浮かべながら、僕に文庫サイズのハードカバーを差し出した。陽光を浴びて仄かに光る薄緑色の表紙に刻まれたタイトルはヘルマン・ヘッセの『車輪の下』。読んだことないけど、有名すぎる作品なので大まかな内容は知っていた。少なくとも麗らかな青空の下で差し出すような小説ではないだろう。

「それってバカにしてるの？」

「まさか。お前の考えてるようなことなら、ルソーの『エミール』かモーグリの『ジャングルブック』にするよ」

彼女は冗談めかしたように肩をすくめた。髪は長いがボーイッシュな彼女のその動作は、僕には羨ましくなるくらい様になっていた。「ただ単に感銘を受けたんだ。自我の目覚め、って観点で。真面目

なお前にピッタリだと思っただけだな」

「僕、この話あんまり好きじゃないな。読んだことないけどオチ知ってるし」

受けとってページをペラペラと捲る僕に、少し残念そうにその吊り目がちな目を細めた。

次の日彼女が持ってきたのは、川端康成の『伊豆の踊り子』だった。短いし、文体も読みやすかったが、本を渡す時に「主人公がストーリーカーっぱいし、お前にそっくりだなんて」と言われたことから、実は昨日の受け取り拒否が彼女を不機嫌にしていたことを悟った。自分の思い通りに物事が進まないと、不満を面に出すことなく、チクリと余計な一言をいう。不機嫌じゃなくても口が悪いのは確かなので、彼女の機嫌を推し量るのはなかなか難しいのだ。

彼女は文字通り本の虫だった。

ならば何故図書委員を選ばなかったのかと訊いてみたところ、

「仕事中に読書は出来ないだろ」

と正論を返され驚いたのが記憶に残っている。

おかしなところで彼女は真面目だった。

自分の信じていることに対してはどこまでも真摯に取り組むのだが、そうでないところではとても不真面目だった。

本をオススメして貰う代わりに、僕は彼女に勉強を教えた。中学程度で誇る気などないし、別段天狗になっっているわけではないが僕は昔から勉強は出来たのだ。当初の彼女の成績は悪くみても上の下だったが、僕の手解きがあってか、一年で成績上位者に名を連ねるくらいにはなった。三年の模試で、二人で学年一位二位をとった時、屋上でハイタッチ交わしたことを今でも鮮明に思い返すことができる。

屋上に行くのが厳しい季節などは、サボタージュ先は応接室に変更された。これまた鍵を不正入手したらしく、お偉いさんの接待に

使われたりするから、ふかふかと座り心地のよいソファーにはしたなく寝転ぶ彼女を見ながら、バレたら停学もあり得るんじゃないかとビクビクしたものだ。

暖房器具はゴウンゴウンと唸りを上げているが、照明は察知される恐れが高いのでつけなかった。

冬の早い日の入り。薄暗い室内。

彼女と二人きりという状況は思春期の僕には心臓が破裂しそうなくらいの緊張感を与えた。結論から言うと、奥手な僕らにそういうイベントが起こるはずがなかったのだが。

本を紹介しあたり（この頃になると僕も彼女の影響で本を読むようになっていた）、勉強を見合ったりと、していることに変化はないが、バレないようにボソボソと囁き合つのは、内緒話をしているようで僕の心臓を高鳴らせた。

「今日は雪が降っているから、屋上に行こう」

前後の繋がりのない日本語と突拍子のない発言も彼女の得意技だった。曰わく「他の生徒が体験してないことを経験したいんだ」そうだ。

「寒いよ」とコートを羽織ってガクガクと震えながら眺めた、絹の布を被せたみたいに白に染まっていく街は、原初風景として、僕の眼下に今でも焼き付いている。

死んだみたいに静まり返る街、雪が積もっているから音を吸収しているのだろう。

思い出すとこっぴड़かしくて死にそうになるのだが、この時僕は彼女に聞こえないように小さく口内だけで「好きだよ」とつぶやいた。

二年生の終わり頃には、彼女への好奇心は明確なカタチを持って恋愛感情に変わっていた。ただこの心地良い関係が崩れるのが怖くて、僕がはつきりと思いを伝えるのはだいぶ先になる。

僕の言葉に気が付かない彼女は、舞い散る雪を全身で受けながら耳とほっぺたを真っ赤に楽しそうに笑っていた。

三年生になっても僕らは風紀委員を続投し、秘密のサボタージュは続けられた。

しかし受験を控えた僕らに、前ほどお互いの時間を合わせる余裕がなくなり、見回りが終われば僕は塾に、彼女は自習室に勉強しに行った。すれ違い、とまではないが、前ほど僕らの時間は共有されることはなかった。だからこの密かな思いを風化させることを、心のどこかで恐れていたのかもしれない。

僕は忘れないだろう。

風紀委員のメインの仕事と言っても過言ではない、文化祭の見回り。緑色の腕章を二人揃ってつけ、ただぶらぶらと賑わう校内を徘徊したことを。いつもと違う、上気した空気に僕は単純に興奮していた。

「音楽の終わりで手を取っていた異性と結ばれるらしいぞ」

「ここでふける僕らには関係ないじゃん」

「なんだ？ダンスに参加したかったのか。今からでも遅くないぞ」

「そういうわけじゃないけど」

後夜祭のフォークダンスを、いつもの秘密の場所で俯瞰しつつ、照明の灯りで赤く染まった彼女の頬を僕は少しドキキしながら眺めた。オクラハマミキサーのBGMは今の気分には陽気すぎるが、祭りの締めくくりには、ちょうどいいだろう。

思えば10月の終わりの文化祭、この日始めて彼女から明確な進路の話を聞いた。それによると彼女は遠くの高校に進学を決めているらしい。彼女の偏差値との釣り合いが取れていなかった。

「なん、で？」

彼女は一生懸命勉強した。少なくとも僕と同じ進路志望、隣街の有名進学高でも落ち込ばれることはないレベルに。

「まあ、色々あるんだよ」

「色々ってなんだよ！なんでそんな適当な進路を選ぶんだ！なんで君はッ！なんで……」

別離が、確約した未来になろうと鎌首をもたげていた。

「なんで君は、勉強してきたんだ？」

ここまで語気を荒げたのは、今までの人生であの時が始めてだった。

「家の都合だなんてありふれた理由を持ち出す気はない。だけど、あたしの人生はあたしのものだ。大丈夫、知識は無駄にならない」何を言っているのかいまいちわからなかった。

情けない、と今でも思う。なんで僕が慰められているのかも、わからなかった。

「だから、高校で頑張って、一緒の大学に行こう。だからしばらくお別れだ」

こうして中学の卒業は、同時に彼女との別れの意味を持つようになり、他の学友との進路の違いなど気にもしなかった僕に、たった一人との別れがここまで辛いものだ意識させたのは、恋と呼ぶには幼な過ぎる感情の嵐だった。

進路について、ちらりとも思わなかったわけじゃない、彼女といつまでも一緒にいたいという感情が邪魔して、考えないようにしていただけた。

文化祭が終わってからの日々は目まぐるしかった。時間の質が濃く、薄く、中学の貴重な年はこうして過ぎていった。

三年は部活を引退し、委員会活動も免除される冬休み前。最後の見回りも屋上でサボリながら過ごした僕らに、学校の名誉生徒を名乗る資格はないだろう。

「雪降らないね」

「うん」

「今年は、暖冬だから、……残念だな」

「……うん」

結局その年雪がちらつくことはなかった。中二の時に彼女と雪を見ていてよかったと僕は思う。

「桜は咲くかな」

「藪から棒になんだ。桜なら春になれば咲くだろ」

「春じゃなくて卒業式に咲いてるのがベストだよな」

「……どうかな。気温が高ければ卒業式には間に合うんじゃないか。頑張れ地球温暖化」

「うん、頑張れ地球温暖化」

不謹慎な僕らは無邪気にそう言って笑った。

それから屋上に行くことはなくなり月日は流れる。

春に、僕と彼女は無事に互いの高校に入学を決め、卒業と同時の別離は確定的なものになった。

だから最後のチャンスだった。僕のけじめと決着は来たるその時まで清算を済ませなければならない。

久しぶりに屋上に揃って登った僕は、彼女に溜め込んでいたすべての思いを吐露した。

「……」

黙って聴いていた彼女は、すべての告白が終わった僕にゆっくり聞かせるように、優しい声で応えてくれた。

「凄く嬉しいし、驚いた」

前置きは短く、端的な返答は凄く彼女らしかった。

「お前のこと好きだよ。だけどこの『好き』は友達としての好きであって恋人としての好きとは違う」

予感があった。僕と彼女は生きる世界が違う。彼女は少し先の次元を、どこか遠くを見ている、そんな予感が。

「お前の人間性は『好き』だ。だが、この思いが『恋』に変わることはない」

僕の初恋はこうして終わった。

言い終わると彼女は膝を抱えて鼻をすすりだした。

初めて見る、女性の泣くところ。僕も震える声で彼女に声をかけた。

「泣かないでよ」

「泣いてないよ。泣いてなんかない」

「普通は告白した方が、な、なくもんだよ」

いつも気丈な彼女が、そんな声を上げるなんて憧れとの乖離が発生していた。だけど、同じ目線の彼女は、余計に愛おしく思えてしまっ。

諦めが悪いなあ、なんて思いながらも、僕の景色が涙で滲んだ。

「お、お前だつて、泣いてるじゃないか。あ！あ、あたしは泣いてなんかないけど。お前は泣き虫だな」

「君だつて」

アスファルトに落ちた涙が、丸いシミを作った。卒業まで幾許もない、春と呼ぶにはまだ早い季節のことだった。

卒業式に彼女と僕は短い言葉を交わし、新たな旅路へとお互い踏み出した。アツサリとし過ぎるくらいスパッと別れたように思う。それは僕らしい終わりだったが、やっぱり寂しかった。

春休みは手続きや高校の入学課題などやることがたくさんあり、今思うとあれだけ多忙な春はなかったように思える。

そんな春休みも終わりへと近づく穏やかな1日だった。

やっと諸々の作業を終わらせ、家でくつろいでいた僕は、鳴らされたチャイムに急かされるように玄関に出た。

「なんだか随分久し振りだね」

玄関先には彼女がいた。初めて見る私服は新鮮で、大人っぽくて綺麗だった。

それから街をぶらぶらし、僕は風紀委員の見回りを思いだして懐かしさの奔流に飲みこまれそうになった。

「桜、咲いたな」

「卒業式に間に合わなかったね」

「あ、そうだこれ」

おずおずと差し出された、一冊の文庫本に目線を落とす。『車輪の下』だった。あの夏の日を思いだし泣きそうになる。

「あたしが薦めた本で、これだけは読んでくれなかったからさ。差し出がましいようだけど、よかったら」

僕は彼女から饒別として文庫本を一冊受け取った。

「ありがとう」

ぐつとこみ上げてくるなにかを抑えて、僕はその本を胸に抱いた。ページの隙間になにか挟まっている。

彼女はまたスタスタと先に進んで歩いていく。初めて会った時と同じように、彼女の背中を追いかけて足を動かし、本を開く。

屋上の鍵、正確には彼女が無断で作った合鍵が挟まれていた。

「鍵を貰ったつてもう卒業したから、屋上には行けないよ」

「鍵？なんのことだ？」

クスクス笑いながら、僕は彼女の横に歩調を合わせる。

「とぼけないでよ」

「さあ、まったくなにおっしやってるのか」

知らないフリは、彼女にしては珍しく精一杯の照れ隠しだったのだらう。

くすぐり合うような笑い声を上げながら桜のトンネルをくぐった、その思い出が鮮明に蘇ってきた。

少しかすれた本のページには桜の花びらが挟まっていた。

久し振り本棚の整理をしていて、パタリと床に落ちた一冊の落下音で昔のことが蘇ったのだ。

その後、風の噂で彼女が高校卒業と共に遠くに引っ越したときいた。

だったら俺が振られたのも納得がいくな、と一人ごち、腰をか
めて、床に落ちた『車輪の下』を拾う。

裏表紙には、『HK』と鉛筆で彼女のイニシャルが記されていた。
「今、なにしてるんだろうな」

屈んだからか、鼻の奥がツンと痛んだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1446p/>

桜色車輪

2010年11月26日00時26分発行